

「スマトラ型巨大地震・津波被害の軽減策」プロジェクトの概要

Overview of the Restoration Program from the Giant Earthquakes and Tsunamis Project

スマトラ型巨大地震・津波被害の軽減策 研究グループ 加藤照之 [1]

Kato Teruyuki Restoration Program from Giant Earthquakes and Tsunamis Research Group[1]

[1] -

[1] -

2004年12月26日にスマトラ島沖で発生したプレート間地震は約1200kmの沈みこむプレート境界を破壊し、インド洋に巨大な津波を発生させた。この地震・津波により、インドネシアをはじめとするインド洋沿岸諸国は未曾有の大災害を蒙った。また、この地震によって周囲のプレート境界域の地殻活動が高まり、2005年3月ニアス島地震をはじめ、2006年5月のジャワ島中部地震、2006年7月のジャワ島南方沖地震と大きな災害をもたらした地震が継続して発生している。

我々は、このような巨大地震・津波の発生を契機として、その発生のメカニズムを明らかにし、将来来るべき同類の連動型巨大地震への教訓を学び、さらには大規模な災害からの復興策を提言することを目的とし、国際的な研究者組織を構築して学際的な研究を実施している。本講演ではこの研究プロジェクトの概要を紹介する。

この研究プロジェクトは文部科学省科学技術振興調整費（「我が国のリーダーシップの確保」プログラム；課題名「スマトラ型巨大地震・津波被害の軽減策」；研究代表者 加藤照之）によって平成17年度から3ヵ年計画で実施されている。本研究は以下の4つのサブグループから構成されている。

テーマ1. スマトラ型巨大地震・津波の発生メカニズムの解明（グループリーダー：佐竹健治）

テーマ2. 地震津波に対する防災力向上のための人材育成に関する研究（グループリーダー：山岡耕春）

テーマ3. 津波警報システムの有効な活用に関する研究（グループリーダー：今村文彦）

テーマ4. 地震・津波被害からの復興策と都市政策（グループリーダー：家村浩和）

これら4つのサブテーマはそれぞれ3～5つの研究課題から構成されている。多くの研究課題では担当研究者がスマトラ地震津波の後に現地調査を行って、この未曾有の大災害からの復興に大きなかかわりを持って研究を進めている。この研究で得られた知見は、日本列島の南岸に将来予測される巨大な連動型巨大地震に対する大きな教訓となると考えられる。

本研究課題のもう一つの大きな目的は、日本がリーダーシップをとりつつ、アジア全体に広がる地震・津波関係の研究者のネットワークを構築することである。アジアは地震・津波の多発地帯になっている一方、関係各国の地震・津波の研究レベルは必ずしも高いとはいえない。豊富な研究実績と地震津波の被災経験を有する我が国がリーダーシップを発揮して、関係するアジア諸国の研究者と連携して将来予測される連動型巨大地震・津波の災害軽減策を講ずることは日本の国益に照らしても極めて重要なことであると考えられる。

特に、本研究では、地震・津波の発生メカニズムの探求（知る：サブグループ1）を基礎とし、地震・津波の被害の軽減のための各種方策を検討し（作る：サブグループ3及び4）、これらの知識を地域住民や地方の行政に提供する（学ぶ：サブグループ2）といった、包括的な災害軽減策を学術の立場から提言したいと考えている。地震・津波被害は、その発生に関しては共通なメカニズムを有するものの、災害の現れ方はその土地の文化的・社会的背景によって極めて多様になる。また、被害を受けてからの復興策も土地固有の文化や社会的背景により最適な筋道は変わってくると考えられる。このため、関係する研究者は自身の専門分野に閉じこもることなく、異分野の研究動向を把握しながら災害復興への対応を考えるべきであろうと考えられる。スマトラ島沖巨大地震・津波は決して特別の現象ではなく、他のプレート収束帯においても発生する可能性がある。来るべき巨大な連動型巨大地震に伴う災害に対して何らかの指針を与えられるよう、研究を進めて行きたいと考えている。